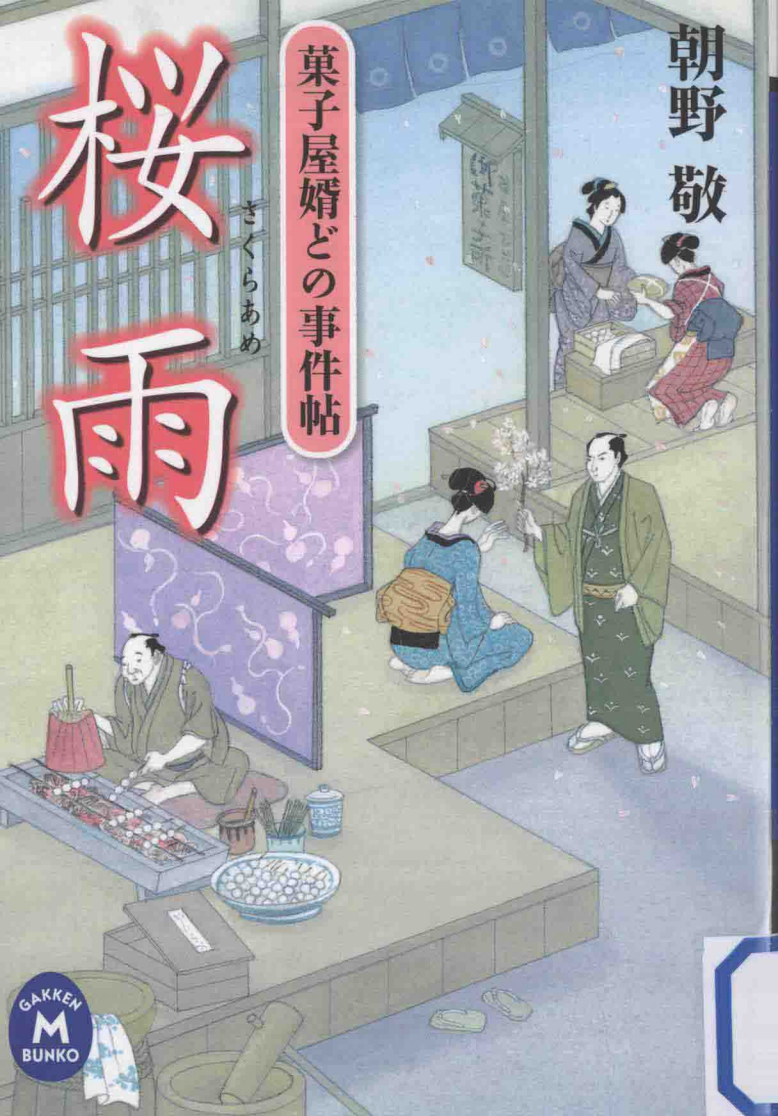
桜雨

さくらあめ

菓子屋婿どの事件帖

朝野 敬



GAKKEN M BUNKO

桜雨

菓子屋婿との事件帖

常州大学図書館
藏書章

朝野 敬

学研M文庫

菓子屋婿どの事件帖　桜雨

朝野　敬

学研M文庫

2012年3月27日　初版発行

●

発行人――脇谷典利

発行所――株式会社　学研パブリッシング

〒141-8412　東京都品川区西五反田2-11-8

発売元――株式会社　学研マーケティング

〒141-8415　東京都品川区西五反田2-11-8

印刷・製本 ―中央精版印刷株式会社

© Yuki Asano 2012 Printed in Japan

★ご購入・ご注文は、お近くの書店へお願いいたします。

★この本に関するお問い合わせは次のところへ。

・編集内容に関することは――編集部直通　Tel 03-6431-1511

・在庫・不良品(乱丁・落丁等)に関することは――
販売部直通　Tel 03-6431-1201

・文書は、〒141-8418　東京都品川区西五反田2-11-8
学研お客様センター『菓子屋婿どの事件帖』係

★この本以外の学研商品に関するお問い合わせは下記まで。
Tel 03-6431-1002（学研お客様センター）

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

本書の無断転載、複製、複写(コピー)、翻訳を禁じます。

本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内の利用であっても、著作権法上、認められておりません。

複写(コピー)をご希望の場合は、下記までご連絡ください。

日本複写権センター　TEL 03-3401-2382

R〈日本複写権センター委託出版物〉

あ -20-1

目次

序　章　桜降る夜　5
第一章　松蔵殺し　20
第二章　足取り　65
第三章　隠されたもの　113
第四章　過去の幻影　163
第五章　喜撰にて　213
第六章　花見の夜に　250
終　章　桜雨　308

桜雨

菓子屋婿どの事件帖

朝野　敬

学研M文庫

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor

目次

序　章　桜降る夜　5
第一章　松蔵殺し　20
第二章　足取り　65
第三章　隠されたもの　113
第四章　過去の幻影　163
第五章　喜撰にて　213
第六章　花見の夜に　250
終　章　桜雨　308

本書は文庫のために書き下ろされた作品です。

序 章 桜降る夜

五つ（午後八時頃）を告げる鐘が、名残を惜しむかのような残響を伴って、八幡宮から聞こえてきた。

ここは深川、永代寺門前町にある料亭、菊川である。頃は春も盛りの弥生三月。富岡八幡宮の桜は満開を迎え、花見を楽しんだ人々の家路につく喧噪が、窓を大きく開け放した座敷にも届いてくる。

春の味覚に溢れた膳と、娘夫婦を目の前にして、檀屋惣兵衛は喜色満面の笑顔を浮かべていた。

桜鯛の塩焼き、竹の子の木の芽和、菊川自慢の蛤汁などの料理はあらかた食べ尽くされている。惣兵衛は箸を置くと徳利を取り上げ、隣で赤い顔をして桜飯を口に運んでいる娘婿に言った。

「縫殿介どの、ささ、もっと飲みなされ」
縫殿介は口を押さえ、慌てて手を振った。
「いえもう、義父上。もう、お酒は十分いただきました」
「まぁ、そう言わず。私はね、こうやって息子と酒を酌み交わすのが夢だったんですよ」
嬉しさを隠しきれない口調で言われると、下戸の縫殿介でも断ることはとてもできなかった。
はぁ、それでは――と口の中で呟き、盃を差し出す。なみなみと注がれた酒を憎々し気に睨みつけ、ええい、ままよ、と目を瞑る。覚悟を決め、飲み干そうとした刹那、横からさっと腕が伸びてきて盃を奪った。
「お父っつあん、いい加減によして」
惣兵衛の一人娘にして縫殿介の妻、さくらである。きっと父親を睨みつけ、自分で縫殿介の酒をぐいっと飲み干してしまった。
「縫殿介さまはお酒が駄目だと、何度も言ったでしょう。お父っつあんの気持ちは分かるけれども、無理強いはするもんじゃないわ」
この言葉に、縫殿介は申し訳ありませぬ、と頭をすくめるようにして詫びた。

惣兵衛はなんとも口惜しげな目を二人に向けたが、娘に盃を取り上げられたまま睨み返される。それで、ようやく縫殿介に酒を勧めるのを諦めてくれた。

「しかしまさか、縫殿介どのがこうまで酒に弱いとは思いませんでしたな」

「不甲斐ないことで。兄にも、よく、つまらぬ奴と言われておりました」

縫殿介は頭を掻いた。

「ですが大旦那さま、菓子屋の主人が甘いものが大嫌い——というよりは、よろしいじゃありませんか」

仲居頭のお敏がとりなすように笑いかけ、惣兵衛に再び酒を注いだ。さくらも加勢した。

「そうよ、お父っつあん。縫殿介さまのお陰で、上野のお店が繁盛しているんじゃないの。それだけでも十分ありがたいことよ」

「そうそう、上野のお店。あたしも先日花見をかねて行ってきましたけれど、あの花見団子——ええと、なんて名でしたっけ」

「さくら香団子のことかね？」

自然、惣兵衛の顔がほころぶ。この団子を上野山下の店で売り出して以来、檀屋の名は両国本所だけでなく、上野や下谷にまで知れ渡ったのだ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「そう、そのさくら香団子ですよ。まぁ、凄い行列で、団子を買うのに半刻（一時間）近くかかりましたよ。美味しかったですねぇ……団子の甘みは控えめでしたが、上に載った桜の餡がちょうどいい塩梅で。みたらし団子も、以前よりずっと美味しくなっていて、あっという間に四本食べてしまいましたよ」

「お敏さん、あれも縫殿介さまが考えられたのよ」

ただただ恐縮している縫殿介に、にっこり笑いかけながら、さくらが言った。

「まぁまぁ、そうなんですか。縫殿介さまは、やはり菓子屋の主人がお似合いなんですね。お嬢さん、いい旦那さまをお迎えすることができて、よかったですねぇ」

「ええ」

さくらがほんのりと頬を染め、惣兵衛は何度もうなずいている。それを眺めて、縫殿介はようやく肩の力をほっと抜いたのだった。

この縫殿介、今は西両国広小路沿いで菓子屋を営む檀屋惣兵衛の婿だが、さくらと夫婦になるまでは、六百石取りの直参旗本諏訪家の次男坊であった。部屋住みの身ながらも剣の腕が立ち、直心影流の道場で代稽古を務めるほどであ

る。

父はすでに亡くなり、兄の右近が跡目を継いでいる。本来ならば、他家に養子に行くべきであったし、実際、いくつか養子の話もあった。

ところが、これと決まる前に、檀屋の一人娘であるさくらが縫殿介を見初めた。

そう、この縫殿介、誰もが認めるいい男なのである。

当代一の人気二枚目役者、尾上菊五郎によく似たすっきりとした目元に、すっと通った鼻筋、形のよい薄い口元。剣術で鍛えた細身の身体は六尺近くもあるが、いつもにこにこと愛想がよい。それゆえ、女たちの憧れの的であった。いや女ばかりでなく、裏長屋に住む男たちにも分け隔てなく声をかけるので、誰もが「縫殿介さま」と親しみを込めて呼び、本所深川辺りの者たちに慕われていた。

二人の祝言が決まったとき、大騒動となったが、誰も縫殿介に不満をぶつけることはできなかった。代わりに矛先は檀屋——それも縫殿介と夫婦になる娘に向けられることとなった。

縫殿介が婿に入った檀屋が、幕府御用達の看板を掲げる大店であれば、そこ

までの大事にはならなかったのかもしれない。

檀屋は、今でこそ両国広小路に大きな店を構える菓子屋であるが、歴史は浅い。惣兵衛の父が家治公の時代に、浅草寺の門前で小さな茶店を開いて団子を売ったのが、そもそもの始まりである。

また、惣兵衛の一人娘さくらが、「小町娘」と呼ばれるほどの美人であれば、娘たちは口惜しいながらも諦めただろう。だが、さくらは不器量ではないが、衆目を集めるほどの器量よしでもなかった。一人娘ということで甘やかされて育てられ、気の強い娘として評判だった。

二人が祝言を挙げたのは、半年前の十月である。今年に入って、惣兵衛は若い二人に店を任せ、鉄砲州に新しく家を建てた。気に入った古参の女中たちを連れ、今は悠々自適、隠居の身である。

見た目ばかりは町人とはいえ、剣術しか知らぬ縫殿介が、店を切り盛りできるはずもない。跡取り娘として育てられたさくらが、今は奉公人をもり立て、きりきりと立ち働いている。

商家に婿に入った以上は、算盤の一つでも覚えなければなるまい。

縫殿介は日々店に出入りし、番頭や手代たちにくっついてはいたが、正直な

ところ邪魔者扱いにされていた。

「若旦那は奥で鷹揚に構えていらっしゃればよいのです。それでこそ、店の者は安心して商売に専念できるのですよ」と、大番頭の与兵衛に言葉巧みに追い払われる。

ならば菓子作りの手伝いでもと思い、裏方に回れば、無口な職人たちは自分の作業に没頭するだけで、縫殿介の姿など見えぬとばかりの扱いである。

当然ながら、家の仕事は女中たちのもので、手持ち無沙汰の日々であった。

――これならば、婿入りを承諾するんじゃなかったな。

昼日中、なすこともなく、座敷にごろりと横になって後悔し始めたころだった。敏感にそれを察知したのか、与兵衛がそばにやってきて遠慮がちに申し出たのが、菓子の味見役であった。

縫殿介は、自慢ではないが舌には自信があった。なにしろ、父の権之助は、江戸中の旨いものを食うのが生き甲斐の男。幼いころからそのお相伴に何度も預かってきた。

もちろん、二つ返事で引き受けた。新しく売り出す菓子の味見だけではなく、すでに店頭に並んでいる菓子の味見もすることになった。

これはもう少し砂糖を増やすべきなんじゃないか。これは塩をほんのわずか。こいつは味がいいが、見かけをもうひと工夫。

と、口出しするうちにでき上がったのが、お敏たちの話題に上った「さくら香団子」という菓子である。

この団子が、上野の寛永寺の花見に訪れる人々の間で人気となった。そこでようやく縫殿介は、檀屋に居場所を得たと言っても過言ではないだろう。

それ以来、手持ち無沙汰のときは、以前のように悠然と本所深川を歩く。本所亀沢町にある、直心影流の道場にも顔を出すようになった。

見知った者たちも、以前のように親しく声をかけてくれる。常に肌身離さずにいた腰の物がない町人姿にも、ようやく慣れた。

ただ、時折こうやって惣兵衛に呼び出され、酒の相手を仰せつけられるのだけは、どうにも忍耐が必要だったが。

その惣兵衛は、今夜はこの菊川に泊まるようだった。さくらの話では、あの仲居頭のお敏は、以前からの惣兵衛の思い者だそうだ。暇を見つけては菊川に通い、泊まる夜も何度かあったらしい。

「それでも、お父っつあんがお敏さんを後妻として、この家や鉄砲州の家に入

れないだけの分別を持ってくれてるから、あたしも与兵衛も黙認しているのよ」

そう、さくらは諦め顔で言ったことがある。続けざま、きっと縫殿介を睨みつける。

「でも、あたしが先に死んだとしても、縫殿介さまだけは絶対に、他に女をつくらないでくださいましね」

その場合、俺はまた侍に戻れるんだろうか。思案しながら縫殿介は「心しておくよ」と答えた。

ひっそりと、心の中で付け加える。

――そのときになってみなけりゃ、分からねえよ、さくら。

外に出るとすでに夜も更け、永代寺の門前町には花見帰りの人の姿もなくなっていた。時折吹きつける風は、まだひんやりと冷たい。

お敏に見送られ、縫殿介は菊川の名入り提灯を手に、さくらと並んで歩き出した。とうに五つ半を過ぎている。

それでも縫殿介は足を速めることなく、のんびりと、さくらと二人花吹雪の

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertor